

「パウロと千人隊長」

2016年09月06日

使徒言行録 22章 22節～29節 パウロの話をごここまで聞いた人々は、声を張り上げて言った。「こんな男は、地上から除いてしまえ。生かしてはおけない。」彼らがわめき立てて上着を投げつけ、砂埃を空中にまき散らすほどだったので、千人隊長はパウロを兵営に入れるように命じ、人々がどうしてこれほどパウロに対してわめき立てるのかを知るため、鞭で打ちたたいて調べるようにと言った。パウロを鞭で打つため、その両手を広げて縛ると、パウロはそばに立っていた百人隊長に言った。「ローマ帝国の市民権を持つ者を、裁判にかけずに鞭で打つてもよいのですか。」これを聞いた百人隊長は、千人隊長のところへ行って報告した。「どうなさいですか。あの男はローマ帝国の市民です。」千人隊長はパウロのところへ来て言った。「あなたはローマ帝国の市民なのか。わたしに言いなさい。」パウロは、「そうです」と言った。千人隊長が、「わたしは、多額の金を出してこの市民権を得たのだ」と言うと、パウロは、「わたしは生まれながらローマ帝国の市民です」と言った。そこで、パウロを取り調べようとしていた者たちは、直ちに手を引き、千人隊長もパウロがローマ帝国の市民であること、そして、彼を縛ってしまったことを知って恐ろしくなった。

パウロは、殺意に燃えるユダヤ人たちに対し、律法と神殿に忠実な者であることを弁明した。同時に、復活の主イエスに出会い、異邦人に福音を宣教する者として立てられた者であることも語った。聞いていたユダヤ人たちは声を張り上げ、「こんな男は、地上から除いてしまえ。生かしてはおけない」とわめき立てた。彼らは上着を投げつけ、砂埃を空中にまき散らした。この行動は怒りが収まらないことを表す仕草である。千人隊長は手の付けられないユダヤ人たちの怒りを見て、一先ず、パウロを兵舎に連行するように命じた。そして、これほどまでにわめき立てる理由を知るために、鞭打ちを命じた。当時、奴隷に対し、自白させるために鞭打ちが当然とされていた。パウロを鞭で打つため、両手を広げて縛った。その時、パウロは傍に立っていた百人隊長に、「ローマ帝国の市民権を持つ者を、裁判にかけずに鞭で打つてもよいのですか」と言った。これを聞いた百人隊長は、すぐに千人隊長のところへ行って、「どうなさいですか。あの男はローマ帝国の市民です」と報告した。千人隊長はパウロのところへ飛んで来て、「あなたはローマ帝国の市民なのか。わたしに言いなさい」と聞いた。パウロは、「そうです」と答えた。千人隊長が、「わたしは、多額の金を出してこの市民権を得たのだ」と言うと、パウロは、「わたしは生まれながらローマ帝国の市民です」と言った。ローマ帝国において、ローマの市民権を持つ者だけが人間としての尊厳が保障されていた。持たない者には鞭打ち、殺そうともお咎めなしであった。市民権を持つ者を卑しめることは、ローマ皇帝を汚すことと見なされた。ローマ人以外が市民権を得るためには、ローマ帝国に多大な貢献をする、あるいは、千人隊長のように多額なお金で買い取ることであった。パウロは生まれながらに市民権を持っていた。パウロの故郷タルソスの市民は皆、市民権を与えられていたという説もあるが、父親が金持ちで生まれた子どもにも市民権を買い与えていたのではないかと推測される。

パウロが市民権を持っていると聞き、取り調べようとしていた者たちは、直ちに手を引いた。千人隊長もパウロを縛ったことを後悔し、何事もないかと恐怖を感じた。パウロが市民権を持ち出したのは二度目であるが、これが、危機のパウロを守ったのである。